

## 適正施設ガイドライン

【スローロリス属 *Nycticebus* spp.】

2025年2月

公益社団法人日本動物園水族館協会

## 1 飼育環境

### 1-1 温度 20-28°C

スローロリス属は東南アジアを中心とした森林に暮らす夜行性の霊長類曲鼻亜目ロリス科の動物である。基本的には暖かい環境を準備する必要がある。しかし、屋外の直射日光が当たる環境下や暑すぎる環境下では体調不良になることがある。レッサースローロリスの生息地でもあるベトナム等の山間部では季節によって気温が 15°Cほどに下がることもあるが、飼育下で 15°Cを下回ると代謝が落ち体調不良になる事例がみられるため、20-28°Cを維持することが望ましい。

エアコンを使用する際は風向きに注意し、風が直接動物に当たらないようにするとよい。また、パネルヒーターを使用する際は、低温やけどの危険があるため、動物の体に直接当たらないよう十分に注意する必要がある。サーキュレーターを併用するのも有効である。時期によってはホットスポットを設けてスローロリスが選択できるようにすべきである。

### 1-2 湿度 50-70%

日本は夏季に高温多湿となり、冬季に湿度が低くなる。飼育下では、エアコンの使用によりさらに乾燥した環境になることが想定される。湿度が低くなると感染症への抵抗力も低下し、体毛や肌の乾燥もみられ肌荒れやかゆみの症状が増加する。逆に、湿度が高すぎても屋内においてはカビや雑菌の増殖につながることから、適度な湿度を保つことが重要である。冬季は加湿器や爬虫類用のミストシステムを利用するなど、湿度を適切に保つ必要がある。農業用の散水システムを利用した事例もある。

### 1-3 音、振動

夜行性で、森林で暮らす動物であることから大きな音や振動に過敏でストレス症状を示す動物である。飼育下においても工事音や園内・館内放送、来園者の声、足音には十分な対応が必要な動物種である。施設を新たに作る際はガラスの厚さや来園者の観覧通路の素材にも配慮することが望ましい。来園者がガラスには触れられないようにする工夫をすべきである。

### 1-4 照明 活動時間は赤色照明を使用

青色や白色の照明は夜行性動物の目に悪い影響を与えるといわれている。そのため、活動時間に蛍光灯で照射されることは絶対に避けることが重要である。爬虫類用の UV ライトなども必要に応じて設置すべきだが、爬虫類用の UV ライトは水槽内での照射を想定したものが多く、確実に当てるのが重要なため、設置場所は餌場の上にするなど十分に考慮する必要がある。

赤色(暖色系)照明が目への影響が最も少ないとされているため、赤色照明を設置することを推奨する。白色の照明に、セロファンや赤く色付けしたアクリルなどを挟むことでも対応できる。

#### 照明

屋外の自然光でない限り、フルスペクトル照明が推奨される(最低 75fc が必要である(Keeling, 1974))。夜明け/夕暮れをシミュレートするための調光機能があることが望ましい。月光浴は、中性密度アセテートフィルターで行うのが望ましい。青フィルターは原猿類の目には白色光と同じように知覚される可能性が示唆されている(Frederick and Fernandes, 1994)。従って、中性濃度が利用できない場合は、赤色光を利用するのがよい。

照明時間長は理想としては、基本赤道近くに分布する動物種であることから、明暗は 12 時

間ごとに切り替わるように設定する。負担を最低限にするためにも、急に明暗が反転するのではなく徐々に明るさが切り替わる設定にすることを推奨する。

また、来園者のフラッシュ撮影は禁止すべきである。フラッシュ撮影により、びっくりした個体が急に動きけがをすることがある。

#### 1-5 屋外、屋内

開園中に活動している様子を展示するならば、明暗を逆転し暗い部屋が必須となる。ただし季節や設備を整えることで屋外でも飼育が可能な地域があるかもしれないが、強すぎる紫外線や暑さ、寒さの基準をクリアできる環境を用意することは日本では難しいため、**屋内での飼育を推奨する**。また屋外では盗難や野鳥などの動物から攻撃されることを防ぐための対策をすることが必須である(電気柵など)。

人と動物の共通感染症の観点(飛沫感染など)や、来園者との接触による事故などを防ぐためにも、展示面がメッシュ素材の構造は避けるべきである。また、種の特性として**毒をもつ**ことからガラスやアクリル等で塞ぐことを推奨する。

#### 1-6 面積、容積 展示場： 2.5m×2.5 m×2.5 m 面積：6.25 m<sup>2</sup> 容積：15.625 m<sup>3</sup>

展示スペースは作業するキーパーが入室することを考えると推奨サイズは必要となる。ケージについては、ラビットケージは不向きで、高さがある大型インコケージ程のサイズを最低限確保する必要がある。ラビットケージで飼育すると糞中のコルチゾールが高い値を示すことがある。ケージ飼育はあくまでも一時的なもので、展示場と同等の広さのケージを用意することが望ましい。

#### 1-7 構造、設備

空間デザインは複雑で変化をさせられることが望ましい。地面に対して水平な枝が交尾のためには必須であるというベトナムの保護施設キーパーからの話がある。天井が格子状なら問題ない。定期的に交換することは衛生面ではいいことだが、組み木ににおい付けを行う習性がある。そのため一気に交換したり、まめに清掃したりすると落ち着かずストレス症状(体中に尿をつける、過度なセルフグルーミングなど)を示すことがあるので注意が必要となる。巣箱は複数用意し、順番に天日干し、消毒することを推奨する。

目隠しとして竹や笹、剪定木を多く入れることでストレス症状が軽減することがあるため積極的に枝葉を入れることを推奨する。

#### 1-8 床材

床材はコンクリートそのままではなく、ウッドチップや土などを敷くことを推奨する。散水することで湿度の保持にもつながり、枝の上に生後まもなくから仔を置いて行動することがあるため転落時の緩衝効果も期待できる。ケージの場合はわらなどを入れておくとよい。シェーピングマットは埃が舞うため注意が必要である。

#### 1-9 巣箱

スローロリスは野生では巣穴で休息することはなく、密集した枝葉の中、もしくは高い樹木の露出した枝の上で休息する。しかし限られた空間ではシェルターの意味合いもあるため巣箱の設置はすべきであると考えられる。樹上で排泄行動をするため、底面も塞いでしまう構造は控えるべきである。

## 参考文献

### 1 飼育環境

- Fischer J.K. (2017): Introduction to Lighting for Animal Care 101. *Animal Keepers' Forum* 44(1-2).
- Helena F.S. and Helga. S. (2001): Management of Lorises in Captivity: A Husbandry Manual for Asian Lorisines (*Nycticebus and Loris Ssp.*): 71-92, Helena F.S. and Helga S. (eds), Center for Reproduction of Endangered Species (CRES) Zoological Society of San Diego, San Diego.
- Siân W., Joanna M.S., Laëtitia M., Felicity O., Janette W. and Susan M.C. (徳山奈帆子ら訳, 2021): 霊長類に関する適切な画像配信のためのガイドライン Best Practice Guidelines for Responsible Images of Non-Human Primates. The IUCN Primate Specialist Group Section for Human-Primate Interactions.
- Streicher, U. (2004): Aspects of Ecology and Conservation of the Pygmy Loris *Nycticebus pygmaeus* in Vietnam. Inaugural-Dissertation, Institut für Zoologie, Fischkrankheiten und Fischereibiologie der Tierärztlichen Fakultät der Ludwig-Maximilians Universität München.
- Minimum Standards for Housing Asian Lorisines (*Adapted from AZA guidelines for the Family Lorisidae*) *Contributed by Lisa Bottcher-Law*
- Keeling, M.E. 1974. Housing Requirements. *Primates Handbook of Laboratory Animal Science* . Volume I: 97-104.
- Frederick, C, and Fernandes, D. 1994. Increased activity in a nocturnal primate through lighting manipulation: the case of the potto. *International Zoo Yearbook* 33: 219-228.